

二〇二二年度

二月二日午前入試（第三回）

国語（45分）

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-14 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

同級生からのいじめが原因で学校に通えなくなった小学五年生の島谷雪乃は、父親の航介とともに東京から父のふるさとに移住する。航介は、雪乃の曾祖父にあたる茂三(シゲ爺)から農業を教わりながら、納屋を使ったカフェを開業しようと思気こんでいる。ある時、航介が、仕事のために東京に残っていた妻の英理子に会いに行ってみると、英理子はインフルエンザにかかり寝こんでいた。看病のためにしばらく東京に残る航介にかわり、雪乃は自分から、茂三の畑仕事を手伝うと言った。

黒いマルチビニールの上には、十センチから二十センチの背丈にまで育った茎と葉が整然と等間隔に並んでいる。

「ここ、見えるだか。」茂三が指さした。「根元を掻き分けつと、ほー、茎が四本も五本も出てるだろう。このうち、細っこいのを引っこ抜いて、太くて立派な茎だけを二、三本残してやるだわ。ほれ、わかるか、このひよろひよろしたやつ。」

「ん、わかる。」

「こいつを……。」

言いながら、茂三の左手が、残す芽の根元を押さえる。同時に右手で細い芽をつかみ、ゆっくりと引き抜く。土の中で、ぷつ、と音がした。同じことがもう一本ぶん繰り返され、残った太い茎が三本になる。

なんだかずいぶんすつきりしてしまつて、これで本当に大丈夫なのかと思えるほどだけれど、

「これをやんねえでほつとくと、せつかくのイモがでかくなねえで、ちっちゃいイモばつとこごろでさちまうだわ。そんなもん出荷できねえからな。ほれ、やつてみな。」

次の苗の横にしゃがんだ雪乃が、見よう見まねで根っこを押さえ、細い茎をおそろおそろ引き抜いてみせると、茂三は相好を崩し、よしよし、うめえもんだ、と褒めてくれた。

小さめの段ボール箱を足もとに置いて、抜いた茎をそこへ集めながら移動してゆく。しゃがんだままの姿勢はすぐに辛くなつて、雪乃は途中、体重をかける足を替えたり、地面に膝をついたりした。それでもすぐにまた、膝や腰や背中が痛くなる。茂三を見やると、黙々と同じ姿勢で作業を続け、もうずつと先のほうまで進んでいる。おかしい。もしかしてシゲ爺はアンドロイドなんじゃないのか。

日がだんだんと昇つてゆくと、湿った土の匂いが強くなる。ほつくりと耕された土と、完熟堆肥の入り混じった匂い。朽ちた落葉にも似た清潔な匂い。雨が降り出す時にもこんな匂いがするのを、今や雪乃はよく知っているのだつた。

広い畑に植わったジャガイモの芽掻きをするのに、茂三と二人がかりで、まる二日かかった。それから、畝に沿って根元へ土寄せをしてやるのもう一日。この作業をしておかないと、やがてできるイモが日光にさらされて緑色になり、これまた出荷できなくなつてしまうのだという。

雪乃が端から端までのひと畝ぶんの芽掻きや土寄せを終わらせる、その倍以上の速さで茂三が仕事を終えてゆく。それでいて決していいかげんなことはいないし、出来映えも美しい。比べてみると、どの畝がどちらの担当だったか A で、雪乃は何だかがつくり気落ちしてしまった。

「もうちよつとくらいは、ちゃんと手伝えるかと思つただけだな……。」

しょんぼりとつぶやく隣で、

「だれえ、なーにこいてるだあ。」

茂三が身をのけぞらせるようにして雪乃を見る。② ひどくびつくりした顔だ。

「雪坊がいなけりゃ、おれ一人でぜーんぶやらにゃならんかっただわ。そしたら、四日、五日、はあーるかかったって半ぺたも終わらねかったに。そーだらう？ これは、おちようべたれてるわけでねえお。おれも、雪坊も、きっちり一人前の仕事をしただわ。」

自分の仕事に自信を持ちな、と言われて、やっと顔を上げる気持ちになる。

「まったく、さすがは親子だわい。」

「え？」

「航介のやつも最初のうち、まるつきりおんなじようなことで悔しがってたに。」

「うそ、お父さんも？ ちゃんとできないからって？」

茂三がおかしそうに頷く。

「この爺やんが、いったい何十年かかって畑をやってきたと思ってるだ。そう簡単に真似されちまったんじゃあ、こっちの立つ瀬がねえに。」

くわつくわつくわっ、と黄門様みたいに笑われてしまえば、雪乃も納得するしかないのだった。③

英理子の看病を終えた航介が戻ってきたのは、翌週の半ばを過ぎてのことだった。熱が三十七度を超えなくなったことをきっちり確認し、すぐには無理をしないように、こんこんと言い含めてから帰ってきたらしい。

作業の済んだジャガイモ畑を見渡した航介は、

④ 「まさか、帰るまでに全部終わってるとは思わなかった。」

本気で驚いたようだった。

その日、久しぶりに四人で囲む夕食を終えると、茂三はテレビを観ながら横になり、すぐにうたた寝を始めた。洗いものはヨシ江に任せて、雪乃は昼のうちに終わらせられなかった算数のドリルを広げる。

その横で、航介はこたつ板に肘をつき、ヨシ江の剥いてくれた名残のリンゴを食べながらぼうつと呟いた。

「どうも心配なんだよなあ……。」

「お母さんのこと？」

「よくわかるな。」

「そりゃそうだよ。でも、熱はほんとに下がったんでしょ？」

「そうだけどさ。英理子さんのことだから、何日も会社を休んでた間のぶんを取り返さなきゃとか思っ、また無茶しそうだろ？ これまでだって週に何度も電話で話してたのに、⑤ 肝腎なことはちっとも打ち明けてくれなかったし。」

雪乃も、さつき初めて聞かされたのだった。母親はもうだいぶ前に、編集部から別の部署へ異動になっていたのだという。このところ忙しかったのはその引き継ぎのせいもあったのかもしれない。

「なんだかなあ、あのひとは。そのうちまた一人でいろいろ溜めこんで辛くならなきゃいいけどなあ……。」
とくだん、娘に聞かせているつもりはないらしい。頭の中の考えが口からダダ漏れ、というほうが当たっている。それが証拠に、

「大丈夫じゃない？」

雪乃が言うと、父親はそこで目が覚めたかのように、「えっ、いま何て？」と、こちらを見た。

雪乃は、分数のかけ算の式をノートに書き付けながら繰り返した。

「お母さん、たぶん大丈夫じゃないかな、って言ったの。」

「ええと……どうしてそう思う？」

「なんとなくだけどさ。電話の声が、なんか前と違ってたもん。」

「どんなふうにな。っていうかそれ、いつの電話？」

雪乃は鉛筆を握った手を止め、顔を上げた。

父親は、片方のほっぺたをリングの欠片の形にふくらませたままだ。図体は大きい、きよとした顔つきはまるで小動物みたいに見える。

「ゆうべ。お母さんのほうからかかってきたの。」

「え、俺それ知らない。」

「晚ごはんの後ぐらいじゃないかな。お父さんは？　って訊いたら、『いま下で洗いのしてくれてる』って言ってたし。」

「ああ、あの時か。」

⑥　　ようやく合点がいったように、父親は独りごちた。口の中のリングが邪魔らしく、やっこのことで、しゃくしゃくと咀嚼してから飲み下す。

「それで？　英理子さん、何て？」

⑦　　『お父さんのこと、ずっと借りちゃってごめんね、明日には返すからね』って。」

「へーえ。他には？」

「ほんとにもう一人で平気なの？　って訊いたら、うーん、って唸ってから、『あんまり平気じゃないかも』だって。」

「ええっ？」

父親の声が裏返る。

「あたしもそれはびっくりしてさ。身体のことかと思つて心配もしたんだけどね。だけどお母さん、笑つてんの。」

「けど、平気じゃないって言ったんだろ？　あの英理子さんが。」

「うん。でも思ったのとはちょっと違つて……『ここ何日も、航介さんにすっかり頼つて暮らしたら、一人でいるのが前よりもっと寂しくなっちゃったのよね』って言うの。」

「おいおいおい。そのどこが、〈お母さんは大丈夫〉なんだよう。」

情けない感じに眉尻を下げて宣う父親を、雪乃は見やった。心配はもつともなのだけれど、いったいどう言えば、ゆうべ母親が口にしたニュアンスが伝わるのだろう。あの時の声の感じを聞かせてあげたかった、と焦れる。

「だって、ほら——前はお母さん、ぜったいそういうこと口に出さなかったじゃない。弱音とかそういうの、いつも聞いたことないよ。それってあたしだけ？」

航介が、ふむ、という顔になる。

「いや、ないな。俺もない。」

「でしょ？ ほら、広……。」
はっと口をつぐむ。

※危なかった。〈広志さんも言つてたみたいに〉と、つい口から出そうになった。自分だけならまだしも、大輝までがあのとき立ち聞きしていたことを、勝手に話してしまうわけにはいかない。

「ひ……広……考えてみたらいいよ。」

なんとかがまかしてみた。

「たとえばの話、あたしはさ、何がいちばんしんどかったかっていうと、〈どうしても学校行きたくない〉ってことを誰にも言えなかったのがいちばんしんどくてさ。お父さんやお母さんや、シゲ爺やヨシばあばの前で正直にそう言えるようになったら、それだけですごく楽になったの。何にも解決してなくても、今以上に悪くなんないんだって思えたから。あたしなんかとお母さんは違うかもしれないけど、でも、そういうことは同じかもしれないなって。お母さんも、弱音とかをちよつとでもそうやって口に出せるようになったん⑧なら、前よりは大丈夫じゃないかなあつて。」

「……ふむ。なるほど。」

だからね、と雪乃は言葉を継いだ。

「お父さん、B。お母さんはあの通りの意地っ張りだからさ、仕事が忙しければ忙しいだけ頑張っちゃうじゃん。そのぶん、お父さんのほうから会いに行つてあげて。行つたら行つたでたぶん、『こっちのことは気にしなくていいから。』とか、『しょっちゅう来られるとウザい。』くらいのこと言われるかもしれないけど、凹まなくていいから。そういうの全部、嬉しいの裏返しだから。お母さんってほんとに、お父さんなんか足元にも及ばないくらいの寂しがり屋なんだよ。」

「雪乃……。」

航介が、何とも言えない面持ちで呟く。

「俺は時々、きみの年がわからなくなるよ。」

「どういう意味、それ。」

最後に残つたリングにフォークを刺し、父親が雪乃に差しだしてくる。

「了解。よくわかつたよ。向こうにも、できるだけ帰るようになる。ちよつとくらいこちを留守にしても、きみがいっぱいしの戦力になってくれるってことは今回でよくわかつたことだしな。」

雪乃が、晴ればれと誇らしい気持ちで頷いた時だ。

「ばかたれが。」

突然、こたつの向こう側からくぐもつた声が出た。うたた寝をしていたはずの茂三が、こたつ板の端をつかんでゆつくりと起き上がる。

「子どもを当てにしてどうするだ。」

「いや、当てについて……。」

反論しようとする航介を、じろりと一瞥で黙らせる。

「当てに、してるでねえだか、雪坊を。」

「違うよ、じっちゃん。俺はただ、頼りにしてるってことを言いたかつただけで。」

「言葉遊びはどうでもいいだ。⑨それもこれもおんなじこつたわ。」

雪乃は、シヨックだつた。ジャガイモの芽掻きや土寄せを一生懸命に手伝つた時にはあんなに褒めて、一人前の仕事だと認めてくれた曾祖父が、どうして急に自分を子ども扱ひするのか。もしかしてあれは〈お

ちようべ)に過ぎず、こちらのほうが本音なのか。鉛筆を握る指からみる力が抜けてゆく。

「いいだか、航介。お前の悪い癖だわ。甘えられるもんには端から甘える。利用できるもんは端から利用する。」

⑩「俺はべつに雪乃を利用しては、」

⑪「いいから聞け！」

声が厳しい。

「つもりもへちまもねえだわ。雪坊は、本来なら毎んち学校行ってるはずの子どもだ。まじめに勉強して、暗くなるまで友だちと遊んで、帰ったら宿題して、婆やんの台所でもちよつくら手伝って、あとは風呂へえって寝る、そういう年頃だ。それだけで許される年頃のはずだに。」

そーならず、と念を押されれば、航介もしぶしぶ頷くしかない。

「そりゃあ、いろんな家がある。いろんな事情もある。学校なんか、どうしても嫌なら行かなくなつてかわね、そういう考え方もあるだらず。俺はそのことをとやかく言つてやしねえだわ。ただな、航介。雪坊の人生は、隅から隅まで雪坊のもんだ。いつくら雪坊が、ちよつとばか教えただけでびっくりするくれえ上手に畑をやってくれるからつて、当てにも、頼りにも、し過ぎぢゃなんねえだわ。それは雪坊のもとの仕事じゃあねえんだからな。そのことは、俺と婆やんも肝に銘じておかなきゃなんねえ。ましてや、おめえたち夫婦の都合で、雪坊をあつちへこつちへと振り回していいもんでねえだよ。そーだらず。」

いつしか雪乃は、背筋を伸ばしていた。航介も、反論を忘れたように聴き入っている。

「なあ、航介。お前がここで農業をやつていくために、利用できる制度やら補助金を片っ端から利用するのは止めねえ。うちにや余分な金もねえことだし、痩せ我慢して、それで補助金もらつてる農家と互角に張り合えるかつつたらまあ無理な話だに。そういうもんを甘えだと言ってるんではねえだよ。俺がこやつてるさく言うのはな。お前が、人からの好意をそのまんま受け取つちまつて、まっとう現実的な判断を避けて通つてるように見えるからだわ。力あ貸してくれるしょうが周りにどんだけいようが、そのことと、人を使うのとは別だ。あの納屋の計画にしたつて、それこそ村の寄り合いの延長にするつもりがねえんなら、採算を計算した上で冷静に人を使え。きつちり一人前ぶんの金を出して雇え。広志やらその友だちやら、うちの婆やんやら雪坊やら、みんなの助けを借りりゃあ何とか回つてくつて？ そりゃあ、回つてるうちにいらねえ、回らねえつていうだ。そこんとこ、まっとう突きつめて考えない。」

茂三がふつと口をつぐむと、急に静かになった。ヨシ江はいつのまにか洗いのものを終え、黙つて部屋に引き取つたようだ。

少し喋りすぎたとしてもいうように入れ歯の口をもごもごさせると、茂三はこたつ板に手をついて立ちあがつた。

「俺は、寝る。」

「おやすみなさい。」

雪乃に続いて、航介も言った。

「おやすみ、じつちゃん。俺も、よく考えてみるよ。」

「……おう。」

仏壇の横の柱に手をついて廊下へ出てゆく。畑ではあんなにも頑健そうに見える身体が、家の中だとなぜか頼りない。

「シゲ爺。」

⑫ 雪乃ゆきのは思わず呼び止めた。曾祖父そそうそふがふり返る。

「ありがと。明日も手伝うからね。」

茂三しげぞうは、わずかに迷った末に、苦笑いのかたちに口元をほころばせた。

(村山由佳『雪のなまえ』より)

※(注) 納屋なや 物を納めておく小屋。

相好そうこうを崩くずし 顔をほころばせてにこにこ笑って。

アンドロイド 人間に似せて作られた機械や生命体。

おちようべ ouseji。

黄門様こうもんさま 「水戸黄門」というテレビドラマの主人公。

ヨシ江よしえ 雪乃の曾祖母そそうそば。雪乃はヨシばあばと呼んでいる。

広志ひろしさん 航介こうすけの幼なじみ。

大輝だいき 広志の息子。

あのとき 出題している部分よりも前の部分を指しています。

しょう 人。

問一 ——線①「おかしい。」とありますが、雪乃はなぜ「おかしい」と感じているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分は茂三しげさうに教わったとおりに作業をしているつもりだが、茂三の作業よりもずっと時間がかっており、もしかしてやり方をまちがえているのではないかと思えてきたから。
- イ 自分は作業をしているとすぐに体が辛つらくなってしまうのに、茂三は同じ姿勢のまま作業を続けていても辛そうに見えず、しかも自分よりずっと早く作業を進めているから。
- ウ 茂三は大丈夫だいじょうぶだと言っていたが、細い茎くきを抜ぬかれた苗なえはずいぶんすぼらしく見えており、この苗から立派なジャガイモが育つということが信じられなくなってきたから。
- エ 茂三は先ほどまで何をすればいいかていねいに教えてくれたのに、仕事が始まったとたん黙々もくもくと作業を続けるだけで、自分にまったく指示あたを与えてくれなくなったから。

問二 文中の□ Aに入る最も適当な四字熟語を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 一望千里
- イ 一網打尽
- ウ 一刀両断
- エ 一目瞭然いちもくりょうぜん

問三 ——線②「ひどくびっくりした顔だ。」とありますが、茂三はなぜ「ひどくびっくりした顔」をしたのですか。それを説明した次の文の□ にあてはまる言葉を文中から十三字でぬき出して答えなさい。

茂三は雪乃がした作業について□ と評価していたのに、雪乃は、ちゃんと手伝えていないと落ちこんでいたから。

問四 ——線③「雪乃も納得なつとくするしかないのだった。」とありますが、雪乃は何に「納得」したのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 畑仕事をしてきた年数が違ちがうのだから、自分も航介こうすけも、すぐに茂三と同じようにできないのは当然であるということ。
- イ 都会で暮らしてきた航介や都会で生まれ育った雪乃が、茂三と同じぐらい立派な畑仕事をすることは絶対に無理であるということ。
- ウ 航介と雪乃は親子なのだから、畑仕事がちゃんとできなくて悔くしがる点がよく似ているのは当たり前であるということ。
- エ 航介も雪乃も、これから何十年も畑仕事をやっていくのであるから、笑いながら楽しく作業することを覚えるべきであるということ。

問五 —— 線④「本気で驚いたようだった。」とありますが、航介は何がどうなっていたことに「驚いた」のですか。次の文の にあてはまるように十五字以内で答えなさい。

自分が帰るまでに こと。

問六 —— 線⑤「肝腎なこと」とはここではどのようなことを指していますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 英理子が高熱を出していたにもかかわらず、仕事を休めずにいたこと。
- イ 英理子が航介や雪乃と会いたいと思いつながら、本音を隠していたこと。
- ウ 会社の編集部での仕事があまくいかに、英理子がなやんでいたこと。
- エ 働く部署が変わったこともあり、英理子の仕事がいそがしかったこと。

問七 —— 線⑥「合点があった」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 思い出した。
- イ 目がさめた。
- ウ 納得した。
- エ 言葉にできた。

問八 —— 線⑦「ごめんね」とありますが、英理子はどのようなことに対して「ごめんね」と言っているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 航介を自分の看病のために東京にとどめてしまったことで、雪乃と航介を引きはなしてしまったこと。
- イ 航介も自分もしばらくのあいだ雪乃に電話をかけることができず、雪乃に無用な心配をかけてしまったこと。
- ウ 航介と共に自分も雪乃のところへ行く約束だったのに、インフルエンザにかかって寝こんでしまったこと。
- エ 航介に頼ってふたりで暮らしている間、ひとりできびしくすごしている雪乃のことを忘れてしまったこと。

問九 ———線⑧「前よりは大丈夫じゃないかなあ」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 雪乃が英理子のことを「前よりは大丈夫じゃないかなあ」と言っているのはなぜですか。解答らんの「英理子が」につながるように二十字以内で答えなさい。

2 雪乃が英理子のことを「前よりは大丈夫じゃないかなあ」と言っているのは、以前自分にどのようなことがあったからですか。解答らんの「ことがあったから。」につながるように三十字前後で答えなさい。

問十 文中の□ Bにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア もっと畑の仕事を手伝ってよ
- イ もっと東京へ帰ってあげてよ
- ウ もっとあたしのことも心配してよ
- エ もっとお母さんを信じてあげてよ

問十一 ———線⑨「それもこれもおんなじこったわ。」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 航介が雪乃を置いて留守にすることも雪乃に畑仕事を任せられることも、雪乃につらい思いをさせる点で結局同じであるということ。
- イ 航介が雪乃を当てることも頼りにすることも、子どもを自分の都合で利用する点で結局同じであるということ。
- ウ 航介が雪乃を子ども扱いすることも大人扱いすることも、雪乃の気持ちを考えていない点で結局同じであるということ。
- エ 航介が英理子のところへ行くことも雪乃に畑仕事をさせることも、農家の仕事を甘く考えている点で結局同じであるということ。

問十二——線⑩「鉛筆を握る指からみるみる力が抜けてゆく。」とありますが、このときの雪乃の心情として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 畑仕事を手伝わせてくれた茂三から、実は自分の手伝いをじゃまに感じていたという本音をきかされたので、茂三に申し訳なく思っている。

イ 茂三が、本来ならば自分も英理子の看病に行くべきだったと言ったことに対し、航介について東京へ行かなかったことをこうかいしている。

ウ 茂三が、自分を子ども扱いするような言葉を口にしたことに対し、自分の仕事を認めてくれたのは茂三の本心ではなかったのかと疑っている。

エ 畑仕事を手伝ったときはほめてくれていた茂三だが、実際には自分のことを当てにできないと思っていたことを知ったので、悲しんでいる。

問十三——線⑪「いいから聞け！」とありますが、このあとに続けられている茂三の発言についての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 茂三は雪乃や航介のことを本気で気にかけており、そのため航介に、雪乃の人生や自分の仕事についてよく考えろということ伝えようとしている。

イ 茂三は雪乃がはやく学校に通えるようになるべきだと考えており、航介や雪乃にもそれとなくそのことを伝えようとしている。

ウ 茂三は航介の納屋を使った計画そのものを悪いとは言っていないが、航介の今の計画では利益を出すのは難しいと伝えようとしている。

エ 茂三は雪乃が家に住んでくれたことは喜んでいるが、学校を休んでいる雪乃を航介がしからぬのはおかしいということ伝えようとしている。

——線⑫「ありがとう。明日も手伝うからね。」について四人の生徒が話し合いました。この部分についての意見として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 生徒A—雪乃^{ゆきの}は、茂三^{しげぞう}が「学校なんか、どうしても嫌^{いや}なら行かなくてかまわね」とはっきり言ってくれたのがうれしかったんじゃないかな。茂三は昔の人だから、学校をずる休みするのはよくないことだと考えていたに決まっているけれど、雪乃が学校に行けない事情を理解して、学校に行かないことをちゃんと認めてくれたからお礼を言っただと思うよ。

イ 生徒B—それよりも、茂三が畑仕事や両親のことを手伝わなくてもいいと言ってくれたことに「ありがとう。」と言ったと考えた方がいいんじゃないかな。茂三の言葉からは、雪乃の勉強^{べんきょう}が遅^{おそ}れることを一番心配していることがわかるよ。雪乃が勉強に集中できる環境^{かんきょう}を作るために茂三がいろいろと考えてくれていることを感じて、雪乃は茂三に深く感謝したんだよ。

ウ 生徒C—「いつしか雪乃は、背筋を伸ば^のばしていた。」というところからは、雪乃が自然と真剣^{しんけん}に話を聞いていたことがわかるよね。雪乃は、茂三が自分や航介^{こうすけ}のことを真剣に考えてくれるとわかったから、思わず感謝の言葉が出たんじゃないかな。だから雪乃も茂三にもっと何かをしてあげたいと思って「明日も手伝うからね。」と言っただと考えられるよ。

エ 生徒D—「雪乃は思わず呼び止めた。」とあるから、自分でも意識しないうちに声が出たとわかるよね。茂三が「厳しい」声ですつと航介のことをせめていたから、ごきげんをとらなきゃと思つて自然と声が出たんじゃないかな。「明日も手伝うからね。」というのも、茂三にお世話になつている立場だから、自分もちゃんと働きますと伝えておきたかったんだよ。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 経済セイサクについて意見をかわす。
- ② サンランしたごみをかたづけろ。
- ③ 新しい雑誌がソウカンされる。
- ④ 今回の旅行はリクロをとる予定だ。
- ⑤ 家に商品をトドけてもらう。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① この工場では厳密な検査を行っている。
- ② 問題点をクラスに周知する。
- ③ わが家は畑を領有している。
- ④ スポーツ選手としての資質がある。
- ⑤ 彼女には気品が備わっている。

問三 次の①～⑤の意味を表すことわざとして最も適当なものを後のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① うまい人でもときには失敗するものだということ。

- ア 門前の小僧習わぬ経を読む
- イ 弘法にも筆の誤り
- ウ 釈迦に説法
- エ 馬の耳に念仏

② 中途半端でどちらの役にも立たないこと。

- ア 枯れ木も山のにぎわい
- イ 背に腹はかえられぬ
- ウ 帯に短したすきに長し
- エ のれんに腕押し

③ 物事をするのにあわてたり、あせったりすると失敗するということ。

- ア 一期一会
- イ あぶはちとらず
- ウ 犬も歩けば棒にあたる
- エ せいでは事をし損じる

④ 何もしないで、よい結果を得ることはできないということ。

- ア 石の上にも三年
- イ ぬれ手で粟
- ウ まかぬ種は生えぬ
- エ 焼け石に水

⑤ 思うようにならず、もどかしいようす。

- ア 二階から目薬
- イ 身から出たさび
- ウ 灯台もと暗し
- エ おぼれる者はわらをもつかむ

問四 次の①～④の各文の□の中に体の一部を表す漢字一字を入れて意味の通る文を作りなさい。

- ① □がいたい忠告こそ本当に自分のためになるものだ。
- ② 二人の議論は白熱していて□をはさむことができなかった。
- ③ かれは年のわりに□の広い人物だ。
- ④ 社会科の自由研究のために□を棒にして調査をした。

問五 「とうてい」という言葉を使った一文を作って答えなさい。

